



Only One

北総教育事務所 特別支援教育通信

令和4年11月号 No.3

第3次千葉県特別支援教育推進基本計画 重点項目 III 「ICT の利活用による教育の質の向上」

ICT の利活用は、令和4年度から令和13年度までの10年間を見据えた本計画の重点項目の一つに挙げられています。

- 【主な施策1】 個別最適化した学びを実現するための ICT活用による指導の充実
- 【主な施策2】 ICT環境の整備
- 【主な施策3】 ICTを活用した関係機関との連携



ICTで わかる! できる!

GIGAスクール構想のもと加速した、学校におけるICTの利活用。皆様の学校は効果的に活用できていますか? 特別支援教育においても、子供たちの「わかる」「できる」を促すために、ICTの利活用は必須といえます。その際、大切なことはICTを利活用することが目的ではなく、何のためにICTを利活用するのかを明確にしておくことです。今回は、ICTの利活用に向けた県の計画と、活用のヒントを御紹介します。

こんな活用事例もあります!

教科領域等：自立活動

自己や他者の気持ち・考えに気づくことができるように、感情を読み取って発表する場面で授業支援アプリを使って子供の実態に応じて意見を入力、提出、共有する。

教科領域等：算数、数学

(「教科等を合わせた指導」として実施)

ICT支援員との連携のもと、販売会のレジ系の活動に主体的に取り組めるよう、プログラミングソフトを用いて一人一台端末で品物を選ぶと金額が表示され計算されるプログラムを作成し、活用する。

おすすめの参考資料!

発達障害のある子供たちのための ICT活用ハンドブック

(文部科学省)

特別支援学級、通級指導教室、通常の学級の3つの指導場面毎にそれぞれ作成されています。



特別支援アドバイザーより

北総教育事務所特別支援アドバイザー
岩井隆典、正木恵子、林羊子



各学校から要請の対象として挙げられる幼児児童生徒は、周囲の人的・物的環境やその有り様により、誰よりも影響を受けやすく、良くも悪くも左右されやすいようです。家庭・施設では保護者、兄妹等、施設職員、利用者等の周囲の人との係わりや共に過ごす生活の中で、学校・園では、教職員、友達との係わり、学習活動、生活行動、集団行動の中で諸々の物事を受け止める場があります。

本人について把握されたものが実態（筆者は状態像と表現）です。学校・園での実態には、「気になる」「問題となる」行動があり、係わり手（場合によっては本人自身）はその状況や対応・具体策に戸惑い・困難さを覚えているのではないのでしょうか。

「気になる」「問題となる」行動の多くは、本人の有する特性、障害（以下特性等）に由来します。特性等は脳の機能に起因するもので、現在の医学では根本は治りません。注意の持続時間を長くさせたり、情緒を安定させたりする状態の改善の薬はあります。しかしながら、学習活動・生活に参加するための特効薬はありません。

むしろ本人には、丁寧に用意された最適な指導・支援調整（時期・程度・範囲）による人的・物的環境の有り様によって、先々の学校生活・人生を「たくましく」生きていくための調整力（自己理解・自己対応力）を身につける契機を作っていける場が学校にはある、と考えるのが良いでしょう。

そこで、対象者への理解を一層深め、指導・支援の在り方を探り続けるためにも本事業を活用してください。アドバイザー派遣の概要を紹介します。

- ① 事前にご準備頂いた関係書類（個別の教育支援計画、個別の指導計画、諸検査の実施結果報告書、チェックリスト等）を授業時間前後に精読
- ② 授業（教科、学習内容・活動との関係）や必要に応じて参観した他の場面で、対象者本人の言動・態度、教師（学級担任と担任以外の教職員・友達）とのやりとりの観察
例）喋る、離席する、一斉指示では動けない、ノートを開かない等
- ③ 机周り・ロッカー、掲示物等の観察
例）教材・教具が整理整頓できない、内容が幼い、文字が整っていない等
- ④ カンファレンス（放課後、空き時間に実施）



参加した学級担任、特別支援学級コーディネーター、管理職、関係する教職員からの話題、エピソード等を聴き取り擦り合わせ、「そもそも、この子はどのような子だろうか」生育史・家庭環境等から、これまでの育ち（成長・発達）と現在の実態、本人自身の特性等との関連を併せ考え、対象者の全体像を描きながら特に本人が分かっていること、できていることを起点に、この子にとって環境（人的・物的）はどうあるべきか指導・支援の内容、方法を探ります。時には座席配置等も関連付けます。問題から課題の明確化を図ります。

対象者は、学級担任だけではなく学校ぐるみ（とくに関係教職員）で連続的、継続的な指導・支援を必要としており、その過程で学校関係者は、本人が自身の姿に気づき、調整力（自己理解と場に応じた自己対応力）を身につけていく育ち（成長・発達）の姿を見据えていくことは大切なことと思われまます。

特性等あるいは、弱み、苦手はあるとしても、本人は他者からの支援を厭わない、支援があれば何とかできる、そのようなたくましさを培いながら、担任の先生と交わした約束（本人が必ずできるもの＝達成目標）を一つ一つ果たし、達成感・成就感を味わい、積み上げ、やがては卒業を迎え、先々強み、得意なところを活かしながら調整力を伸ばし、素敵な大人になってほしいですね。（筆者 特別支援アドバイザー 岩井隆典）